

平等の真意と手話

中 三

「店員は耳が不自由です。受取口ではレシートをご提示ください。」

最近、友達と出かけたときに、とある飲食店で私はこのような貼り紙を見つけた。受取口まで来ると、店員さんは私が頼んだ飲み物を持って辺りを見回していた。私は急いでレシートを見せた。すると店員さんは私に飲み物を渡し、

「ありがとうございます。」

と手話で言った。今はこのように、障害のある人と一緒に働ける社会になっているのだと思った。

そしてもう一つ、私を感じたことがある。それは手話についてだ。店員さんが私にありがとうと手話で言ったとき、なんだか胸が温かくなった。普段、店員さんに、

「ありがとうございます。」

と言われるよりもずっと嬉しかった。きっと、目で直接、ありがとうという気持ちを感ずることができたからだ。

実は、私は小三のころ、手話に興味をもっていた。当時、毎週放送されていた手話の番組は欠かさず見ていたし、祖母に手話の本まで買ってもらったほどだ。

「手話で会話できるようになったら素敵だね。」という亡き祖母の言葉を、今でも鮮明に覚えている。しかし中学生になり、勉強が忙しくなった今、すっかり手話の本を開くことはなくなってしまった。もし今もずっと、手話を覚え続けていたら、あの店員さんに何か伝えられたのになと少し後悔もした。だからまた、少しずつでも、手話を覚えていこうと思う。そして、手話にしかない温かさをいろいろな人に知ってもらいたい。

これからの社会で求められるのは、知識の量ではなく応用力だと言われている。膨大な量の知識をもっているにしても、それを生かせなければ意味はない、ということだ。私は、その応用力の中には、多くの人とコミュニケーションをとる能力も含まれていると思う。多くの手話を知っているにしても、使えなければ意味はないのだ。そうならないために、一歩踏み出さなければならぬ。そのためにまず、私はこれから手話をたくさん覚えていくと

決意した。そして覚えた手話を生かすため、積極的に人と触れ合っていきたい。

今までの私は、手話に対して、「耳の不自由な人が使うもの」という少しマイナスなイメージをもっていた。しかし今は、「誰でも覚えられるもの」「喜怒哀楽や感謝の気持ちを強く伝えられる素敵なもの」というイメージに変わった。手話は、聴覚障害のある人が使うというレッテルを剥がさなければならぬ。そう気付くことができた。それは、あの取組をしていた飲食店のおかげだ。また、耳が不自由ならば接客の仕事を外すというのが配慮だと考えてしまうかもしれない。しかしそれは違うということを学んだ。障害のある人をいたわること、それはもちろん大切だが、それだけが平等ではないのではないか。平等という言葉の真意はそこなのかもしれない。

ところで、あの飲食店の取組について調べてみた。この取組は、海外から始まったそうだが、日本に限らず、世界各地で人権を尊重する動きが広まっているということがある。私たちはこれから、そんなすばらしい社会で多くの人と関わっていくことができる。それは、とても幸せなことだと思

う。私はその中で、たとえ聴覚や視覚などの障害のある人だとしても、コミュニケーションを難なくとれる人になりたい。

この出来事から、誰にでも楽しく過ごし、働き、平等に生きる権利があることを身近に感じた。そしてこの平等という言葉について理解を深めることができた。

「手話は温かいということ」「平等とは、障害のある人をいたわるだけでは成り立たないということ」と私はこう考える。この考えが認められる社会になってほしい。この経験を通して、私は大きく成長できたと思う。この経験から得たもの、考えたことを基に、すばらしい社会を築くために貢献していこうと思う。